

黄泉スズメ



Studio ***46

目次

◆開幕◆	1
in that time	2
◆序◆	3
◆破◆	9
◆急◆	15
◆終幕◆	21
-INFOMATION-	23

◆開幕◆

物心ついた頃から、どうしてその乙女——腹違いの兄の婚約者面をする相手に腹が立つのか、天に棲む彼女は今わの際まで気付けなかった。

——あいつだけは、絶対に殺す。

その兄の武器で胸を貫かれた、仕組まれた裏切りの断末魔の中。彼女が地上を旅していた頃、何かと絡んできた紅い妖精^{あか}の微笑みを思い出した。

——あなたじゃ勝てないよ。あなた、ヒトも殺さない甘ちゃんだもの。

魔の気配がする相手だから、取り合わなかった言葉。けれど今、自身の命が消えゆく中で、彼女にはその言葉の現実が吐きそうな程にわかった。

かつて、好きだった絵本があった。本当は弱い人間の少女が、化け物の国で化け物のふりをして戦う逸話。人間の少女もこうして、化け物の力で心臓を貫かれた。そうまでしても戦ったのは、ただ、生き残るためで。

「ああ、うん——……あたしが、甘かった——」

故郷を侵す数多の蛆虫のため、彼女はとっくに外法を使った。それなら今更、何もためらうことなどなかった。

そして彼女は、自らの心を天の羽に移し、寄生できる宿主の出現を待つ。

in that time

二百年に一度、と言われる魔王の動乱で、女は思いがけず生き残った。本来なら魔王側だった女を救った守護者が、女の弟を昏睡から助けるためにかかりきりなので、女は重傷の仲間を仲間の城で看ていた時の事だった。

「——……行くな」

「……え？」

女の傷は、背に宿す天の羽が早くに癒した。仲間だった男はぼろぼろの状態で魔王を裏切り、生きてるのが不思議なほどに衰弱していた。

それでも男も回復が早かった方だろう。さらさらとした赤い髪と、強い赤の目は男が生粋の火属性であることを示すが、それでも女の命を分けて与えられた。女は基本的には水属性の化け物でありながら、火をも扱える天の羽を幼い日に植え込まれたせいだ。

「あんたは——……これから、『黄輝』のために、死ぬ気だろう……」

「……——」

この羽を背に持ち、これまでずっと力を借りてきた以上、それは女には当たり前末路だった。天の羽は「黄輝の宝珠」のために存在し、魔王に奪われていた世界最大の宝を、これから天に戻さなければならない。

赤い髪の男が回復するくらいまで、自由にさせてもらっただけ。今後の女は、天の羽を女に授けた、紅い妖精との約束を守らなければいけない。

けれど女は、知らなかった。黄泉のスズメと呼ばれた女に、天の少女の羽を与えた妖精は、いずれ女が赤い髪の男と出会うことを知っていた。

この身は確かに、あの少女の殺意のためにあるのに。起き上がった男に掴まれた手が離されることはなく、やがて女は男の一人息子を身ごもり、「あり得なかった夢」の柱の一つとなっていく。

◆序◆

黄泉とは、黄色と書くが薄明るいだけの地で、どちらかといえば虚ろな空色であるのだと、天の鳥の透明な羽は銀色のスズメに語った。

——だから黄泉を、『エア』というのは多分当たってる。それ、あんた達は空の意味で使う単語なんでしょ？

ふうん、と、小さなスズメ——銀色の髪を持つ幼い吸血鬼は首を傾げる。

「ミラ達の言葉では、違うの？」

一見は五歳にも満たない銀色の髪の娘が、暗闇の中で、赤い眼を潤ませながら尋ねる。一人で蹲る古城の地下室は、敷物一つなく床石が冷たい。

——あたし達も大分前から同じ言葉を使ってたけど、『空』はエーテルか、スカイかな。レイスウのレインは『雨』で、そんなに変わらないでしょ。

一人であるが、独りではない。この吸血鬼の古城に連れて来られる前に、娘の前に現れた紅い髪の妖精が、天の少女のものという羽をくれた。背に植え込まれたその羽は、吸血鬼である娘の黒い羽と並び、娘の命を使って喋ることができるまでになった。

後からきけば、それは娘が「黄泉」属性だからできる、本来なら不可能な「命の共有」であり、そして禁忌の業「蘇生」らしい。

——本当、何もないところだった、『黄泉』は。今だから思い出せるけど。

ミラと名乗る天の鳥の羽は、吸血鬼の娘にとって、母である人間の女と親しかったという。人間と吸血鬼の間に生まれた娘は非常に成長が遅く、一日の大半は眠って過ごした。人間で言えば、やっと娘が四歳程の動きができるようになった頃に、母は亡くなってしまった。それから母の旧友の甥に引き取られたが、そこから父たる吸血鬼の城に行ったのが先日だった。

「ミラのところには、……母さんは、逝かなかったの？」

そうしたわけで、外見は未だに幼女であるが、娘の知能はなまじっかな人間よりは大人びている。灯り一つない地下室で一人きりで座っていても、誰にも迷惑をかけない生活と思えば、人間の中で生きているよりはましな環境が現在だった。

——多分、あたしの羽が中途半端に人世にあるままだから、リエレルには全く会わなかった。あんたがこんな反則の『黄泉』でなければ、あたしに再び意識が戻るなんて、有り得なかったはずよ。あたしは確かにあの日、あの罫で殺されたんだから……スリージ・ソイルのクソ女のせいで。

紅い妖精から謎に天の羽を植え込まれた時、吸血鬼の娘を初めに襲った意識は、「あいつだけは殺す」という物騒な心だった。娘は元々、己の心が希薄な性格だったので、ミラの心と共存が可能だったらしい。ちっぽけな鏡、と名乗る天の羽は、魔物が天の国を襲った時に殺された少女で、天を守るために戦う「守護者」の家系の端くれなのだと言った。

——悪いけど、レイスウ、あんたにはこれから強くなってもらう。仮にもあたしを世に戻せる程の黄泉——空^{くう}の力を持っているなら、あたしの羽を使えばあんたは、『黄輝の宝珠』の守護者になれる。

「……………」

——スリージはいつか、必ずJの封印を解くために宝珠に近付いて来る。あたしの見立てが正しければ、あんたの力は、守護者の家系……Jの血がもたらした残滓。Jは……リエレルのことが、好きだったから……。

娘の父と言う科学者の吸血鬼は、娘を「黄泉のスズメ」と呼んだ。父がかつて、母と共に関わった天^Jの男の血を温存し、娘の出生に用いたらしいこと。娘は何も知らなかったが、娘の力だけはその縁を示しているのだった。

天の男の血をひくと言うが、娘の躰^{カラダ}自体は人間と吸血鬼の混血だった。人血を摂らなければ成長がととても遅い娘に、やがて科学者の父はしびれを切らし、そもそも血の摂取を嫌がる娘を魔界に追放していた。

「何でおれ達まで巻き込まれるんだよー。お前のせいだからな、レイン！」

「ああもう、うるさい、クラウド。喉が渴くばかりだから黙っててよ」

娘はそれも珍しい、赤子から育った双子の男女の吸血鬼と共に魔界に放り出された。その双子も父の研究成果の一つといい、吸血鬼は本来血液の汚染で仲間を増やす生物であるのに、この三人は全員が、人間の女の胎^{はら}で育った混血の吸血鬼だった。

草色の髪^{やかま}のクラウドは常に喧しい。黒髪のテイシーは坦々としているが語調がきつい。レインと呼ばれる娘自身は寡黙で、それも二人はどちらかというと気に食わないようで、お世辞にも性格が合うとは言えなかった。

——いいじゃないの。単純な奴らだし、いざって時は盾にすればいい。

「……………」

何となく、それは嫌だ、と思ってから、娘は初めて強くなろうと願った。人血を摂りたくないという甘えを捨てた。それでもなければ苛烈な魔界で生きて行くことはできそうになかった。

ミラの羽は、冷静ではあるが冷酷ではなく、強気な物言いは弱さの裏返しでもあった。天の島で生まれてすぐ母を亡くしたというミラは、本当は戦いたいわけじゃなかった、といつしか娘に明かしていた。

——守護者の家だから、力があるなら、天を守って当たり前って言われて育ったけど。力も剣も修行はいつも辛かったし、魔物が来れば子供なのに戦わされて、最初は怖かった。怖いなんて、言える状況じゃなかっただけ。

だからミラは、余計兄の婚約者が嫌いになったという。正確には勝手に婚約者だと思っただけで乙女だというのが、スリージ・ソイルは、何かあれば守護者が戦え、とすぐに周りを引っ張り出した。確かに宝珠という強大な力を受け継ぐ者は守護者の家系しかいないが、天の島に住む天の民も一人一人は、鍛えれば強くなれる化け物であったにも関わらずに。

——少なくとも剣や喧嘩なら、あたしだけでなくあいつがやったって何も問題なかったはずよ。あいつはJにも頼りっぱなしだったし、自分は何も強くなろうとせずに、ただJを、次の黄の守護者にしようと思死だった。Jはそんなの、なりたがってなかったのに。

むしろ乙女は、平和主義ですらあったという。力を使いこなすために、日々自らを削るミラ達を横に、「力を持つことは争いの元になる」などと、自分達が何もしないことを正当化し続けていた。

「.....誰も強くならなかつたら、天を守る人もいなくなるのに？」

——本当に、おためごかしよね。あたし達という『力』には散々働かせておきながら、同じ口で『力』を否定する。思えばそれも、魔族が天の島を攻めやすくする.....天の民を無力化しておくための罠だったんだろうけど。

ミラには、戦わない道という選択肢はなかった。それなら強くなるしかなかった。彼女を守ってくれる親はいなかったのだから。

——旅してる時、地上の遺跡で会ったクアンって子も、一見弱そうなのに気丈で、凄く強い力を持ってて。あんな風になりたい、って思ったんだ。

二度とその少年に会えることはなかった。それから数年後にミラは命を落とし、自身の力と心だけを天の民たる羽に残した。それも「黄」の家の力を継ぐ者の一人だったからできたことで、「黄」の家はそうして、生命の根幹たる命の泉を扱う力の主と言ってよいそうだった。

ミラと同じように、銀色の髪の吸血鬼の娘は、戦いたいわけでもなく己を鍛えた。ミラの言うように本当に守護者になるかはともかく、母達の住んでいた地、人界には少なくとも戻れるようになろう、と思った。

魔界は苛烈だ。魔族の血は人間程栄養価が高くない分、生きるためには沢山襲わなければいけず、どの悪魔の管轄地にいてもいずれ追われるか、娘の容貌が整っているため、慰み者として狙われることになった。

「なあ、おれいつも思うんだけど、レイン差し出せば早いんじゃないね、これ」

そう言いつつも、双子は娘の陰に回り、何だかんだと生き残ってきた。

「冗談。アンタみたいな弱小吸血鬼、レインでなければ誰が面倒みんの」

「同程度のくせに弱小言うな。いつもそーやって女同士で固まりやがって」

そんな覚えはない……と娘がこっそり思っても、双子の女の方はいつも娘よりの物言いをする。誰が一番強いかを、よくわかっていると云える。

——それとアイツも、好きな子はいじめたいタイプなだけよ。自分の方が弱いから面白くないんでしょ。

「……それ、聴かなかったことにする」

結局、付き合いが長過ぎて、誰もが腐れ縁の家族のような関係だった。父が娘を城に連れて来た頃、おそらく父の血を継ぐ吸血鬼の赤子を一人、何故か天使と手を組んで培養していたが、もしも娘に血縁がいるとすれば、その吸血鬼の赤子くらいだろう。ちらりとしか見ることはできなかったが、珍しい青銀の髪がキレイな赤子だった。その髪色を初めて見た時、ミラが「クレス……？」と呟いたのも、ずっと覚えている。

ミラにとって、「J」は腹違いの兄で、「クレス」は「J」の従兄らしい。前代の黒の守護者がクレスで、赤子といた天使は今の黒の守護者と言った。

ミラの羽は、娘が感じ取るものを通して外界の情報を認知する。だから娘が何かの縁に出会う度に、娘との関係を的確に考え出してくれる。

——あの天使は、あたしのもう一人の兄貴の連れ合いだった。どうして、天使になんてなって、しかも仇敵の吸血鬼と手を組んだかは知らないけど……培養されてるあの子は、次の黒の守護者なのかもしれない。いずれ、人界に戻ればきっと、また会う日が来る。

ミラ曰く、「守護者」は天使という、実体のない存在でもなれるという。それなら羽だけのミラにもなれないのか、と娘は思ったが、ミラの狙いはまさにそこで、ミラの羽を守護者に、娘をその「カギ」にしたいと言った。

——宝珠は基本は、封印しなきゃいけないものなのよ。天使のやつ、黒の宝珠を天から持ち出したみたいだけど、今の天はそれだと、魔王の勢力に攻められたら一たまりもないはず……。

それがどれだけ身勝手なことであるのか、羽がとても唸っていたことを覚えている。それほどまでにあの天使にとって、培養していた赤子が多分大切な存在であろうことも。

「……魔王は、いつ頃、また魔界に現れるの？」

——大体、二百年くらいの周期だっけきた。それなら猶予は……もうあまり、残されてない。

ミラが生きて旅をした頃、ちょうど前代の魔王の動乱が起こったという。それから現在、百五十年は経っている。娘も百歳は過ぎて、やっと体格が人間では十代に入ったところだ。魔界で育つのは結局効率が悪く、力自体はかなり強くなったものの、まだ人界に行けるには及ばなかった。

それから五十年後、確かに新たな魔王が台頭してきた頃に、娘はやっと人界に出ることができた。既に天の島が魔王に襲来されてしまった後に。

人界に出るには、自力で次元移動の儀を行えるようになる必要がある。ミラの羽も生前にそこまでの力の制御はできず、羽からの助けだけでは、娘はなかなか人界に出られる化け物にはなれなかった。

しかも人界に出たら出たで、父の側近が迎えという名の追手をかけた。父は人界に出た娘のことなどどうでもよさそうにしていたのに、側近は元々娘を城に連れて行った兄貴分で、娘にとっては人界での生活が終わるきっかけとなった、とても鬱陶しい相手でもある。

——その傍迷惑な善意っぷり、あのクソ女がかぶるわ……。

娘も完全に同意だった。今更城に戻りたくもなく、追手を逃れるために各地を転々として、やがて辿り着いたのが、あの運命の白い花園だった。

「……誰のお墓？」

その森には、あくまで、一時的に身を隠すだけのつもりだった。沢山の屍から生えた魔の樹が茂る森で、娘のような強い気配を潜めるには都合が良かった。南の島という温かい場所はミラの羽とも相性が良かった。

しかしおどろおどろしい森の奥に、まさかおとぎ話の楽園のような一画があるとは。双子を結界の中で休ませて、周囲を探索に出た娘が見たのは、オアシスのような白い花園の一端で、二つのお墓に花を添えている一人の孤高な赤い髪の青年の姿だった。

「……迷ったのか？」

青年は、同じ年くらいに見える銀色の髪の娘に、何の害意もない赤い目を向けた。娘の眼は力の成長の影響で孔雀緑になっており、同じ赤のままであれば良かったのに、と何故か思ってしまった。

青年は、自身の素性を何も話さない。明らかにとても強い魔族であるが、何故かとても不安定な力を持っている。おそらく人間との混血だった。

娘も、吸血鬼でありながら天の鳥の羽を持つ。説明が難しいので、特に何も言わなかった。ただ、幾度も一人で白い花園の墓に来る青年の気配を感じる度に、娘も身を潜める森から出て、花園を訪れるようになった。

「.....ここには、あまり来ない方がいい」

ヒトの屍から生えたような木々が、群生して森を作っている島。それが危険な場所だと娘も承知していたが、だからこそ青年の存在が気になってしまう。青年もそんな娘が心配だったのか、花園に来ることが増えた。

無愛想でも優しい青年に、娘は尋ねる。青年は危険ではないのか、何故こんな所にある墓に通ったり、娘のことを心配したりするのか、と。

「でも.....レイには、花が似合う」

そんなことを、珍しく笑った顔で返されて、娘の時間が一瞬止まった。胸を抑えて黙り込んでいると、青年がそのままの顔で、娘の髪に生花の簪かんざしをさして幸せそうに拙く笑った。

「.....ありがとう」

どうしてなのか、青年の笑った顔が、胸が熱くなるほどに嬉しかった。娘も思わず、初めてかもしれない微笑みを浮かべたくらいに。

青年もそこで、虚を突かれたように動きを止めた。互いに何を言うこともなく、しばらくただ、見つめ合っていたのだった。

ただひたすらに、互いの安否が気がかりで、その花園を訪ねていた時間。それがこの後、隠れ潜む双子の吸血鬼が殺される形で幕を下ろすとは——娘も、そして青年も、試してみない束の間の幸せな一時だった。

◆破◆

魔界からは人界と呼ばれる「宝界」には、世界を守る五つの宝珠が存在している。銀色の髪の吸血鬼の女に植え込まれた羽は、最大の力を持つと言われる「黄輝の宝珠」の縁者である天の民のものだった。

——もうとっくに、魔王に黄輝だけは奪われてるなんて洒落にならない。それにしても本当にあんた、『四天王』なんてやるつもりなの？

人界に出てから、女は双子の吸血鬼と共に、南の四天王に殺されかけた。実際、そこで双子は命を失ったのだが、女の吸血鬼の羽を双子に渡す——ミラの羽を生かす方法と似た要領で命を分けると、双子は何とか蘇った。

南の四天王は、息子である青年に近づく娘が気に食わなかったらしく、息子のこともぞんざいに扱っているのに、娘達を排除しようとしたのだ。その後、青年の双子の弟——母親に可愛がられている方がこっそり、娘に脱出路を教えてくれた。青年には娘達が殺されかけたことは、明かさないように頼んで娘は南の島を後にした。

「.....四天王になれば、一番身中で、魔王サマの命を狙えるわけでしょ？ 黄の宝珠にも近付いたら、ミラの念願も果たせるかもしれないわよ」

——そりゃそうだけど、本命はそっちじゃないでしょ、あんた。ばれればなんだけどね、残念ながらね？

青年は偶然か必然か、母親が娘達を殺しかけた後に、自ら実の母を手をかけ、双子の弟も操り人形とするような苛烈な呪いをかけた。そうして、双子の弟を新たな南の四天王として通しながら、実際に南の四天王の城を取り仕切っているのは青年であることを、あれから三年、女はずっと遠くから感じ取っていた。

女には昔から、とても広範囲に渡る気配探知の特技がある。一度覚えた気配であれば、遠きにあっても現状を探れる。幼い頃に出会って契約していた雨氷の精霊と、天の羽という制御の助けは四天王という存在に足る。

「.....そうね。四天王になれば.....もう一度、会えるかもしれない」

実際には、女が北の四天王として魔王の側近からスカウトされたのは、北の四天王が担当する黒の宝珠について、百年以上行方不明である宝珠の守護者の情報を、女が持っていたからだった。

「ザイにもだけど……あの子、これからどうするのかしら。自分を造った親達も消えて、その理由や記憶も、私が消して……」

南の四天王に殺されかけた双子の吸血鬼を助けるために、娘は仕方なく、父のいる吸血鬼の城に戻った。そこで双子の吸血鬼は、父が培養していた青銀の髪の少年の養分とされかけ、最早親だろうが敵でしかない、と娘は父を殺し、天使も排除し、僅かの間仲良く過ごした少年の記憶も封じた。

——本当、あそこが吸血鬼の城じゃなければ、あたしが止められたのに。まさかあんたが、あんな風に……天使のことを憎んでとは思わなかった。

父と共に、青銀の髪の少年を造っていた天使。黒の守護者であるはずの相手。ミラとは親友だったらしく、それを感じていた娘は、城ではあえて天の羽を使わず、ミラにも最低限の命しか分け与えなかった。

「ミラが甘過ぎるのよ、そこは。あいつが私欲で黒の宝珠を持ち出したりしなければ、黄輝の宝珠も魔王に奪われることはなかったでしょうに」

——……………。

天使は、天使の力を得て守護者となったことを利用し、黒の宝珠の力で失った子供をもう一度作り出そうと試みたのだ。その子供はミラには甥に当たり、ミラが死ぬ直前に生まれた子供なので知らなかったことだった。

娘が天使を、憎む理由は別にある。娘の実の母が亡くなった時に、母の旧友だった天使は、守護天使として母を葬送してしまった。娘は母のことも本当は、命を分けて魂だけでもこの世に留めたかったのに。

——あんた、できるからってそればかりやってるから、もう大して寿命も残ってないんじゃない。吸血鬼は本当なら千年だって生きる種族なのに、あんたはあと十年も怪しいくらいじゃない？

ミラの羽に、百年以上命を分けているだけではない。殺されかけた双子に吸血鬼としての自身の羽を渡すことで、娘の力はとても不安定になった。それが逆に、娘を魔族としては更に高ランクにする結果にもなったが。

「あの子……これから、母親の天使のせいで、守護者になるのかしらね」

そうなればおそらく、確実に敵になる少年。同じ吸血鬼の血を使われた身の点で、弟とも呼べる唯一の家族であっても。

培養されていただけの、青銀の髪の少年には罪はない。記憶を消して、それからは放置して城を後にしたが、父は秘密裏に少年を造っていたので、一年前に側近が少年を見つけたまでは、少年は眠らされたままだった。

——魔族はそう簡単に守護者にはなれないはず。いくら魔の気が強い黒の石でも、吸血鬼として造られた子を守護者と認めるのはよっぽどの時よ。現にアイツ、『カギ』扱いだっただけのもの。だから黒の宝珠は封印されたまま、今でも見つかってないんだから。

「宝珠を守る守護者と、封印するカギか……じゃあ、守護者の方は、これから別に現れるのかしらね……？」

宝珠を狙う魔王の一派、四天王になった女としては、敵対するしかない相手達。女はただ、黄の宝珠に対するミラの未練を果たせれば良かった。ついでに双子の命についても脅されているので、魔王には従うしかない。

黄の宝珠には、ミラが死んですぐ宝珠に封印された、Jという兄が宿る。本来なら魔王の補佐役となる、悪魔の適性を持って天に生まれてしまった兄だった。けれど最後にはミラをかばい、妹が同時に罠で殺されゆく中、兄の命も失われてしまった。これ以上悪魔に利用されないように、せめてもの情けとして、宝珠にその魂を封印された兄なのだった。

——スリージがしゃしゃり出てくるなら、遠慮なくぶち殺すけど……今はもう、あんたと一緒にJを助けられれば、あたしはそれでいい。

女の命を分けられて過ごす中で、ミラが当初に持っていた怨念のような感情は、既にかなり風化しつつあった。最早、黄の宝珠を何とかできれば十分、とばかりに、女の命を使う量も少なくなる一方だった。

「……シア君のことは、放っておいていいの？」

青銀の髪の少年がアラスという名であることを、短い一時の中で知った。少年は本来、ミラの甥として生まれた時にはシアという名だったらしく、女が四天王になる直前に出会った「前魔王」と名乗る男にそう教えられた。ミラや紅い妖精に関わった前魔王は、天の羽が段々存在感を薄くしていることに、悲しそうな顔をして彼らの事情を告げていった。

——どうせ、それもあの妖精が仕組んだことでしょ？　アイツ、言ってたじゃない。あたしがレイスウの羽になったのは、運命を変えるためだって。

その言葉の意味する所は、何もわからなかった。しかしこのまま、女が四天王となれば予定通り。それが妖精からの伝言だ、と前魔王は言った。

——だから、シアも多分、何とかなるんでしょ。あたし達が敵になっても。

随分達観したミラの言う通りだった。その後、弟の少年は黒の守護者になれる力を持つ死天使に出会い、魔王に打ち勝つ。少年から奪った記憶を女も少年に返し、守護者の死天使が女の命もその後に救う。

「レイ姉ちゃん！　水燬^{みずき}、見せて見せて！　汐ノ香も会いたがってる！」

今代の魔王の動乱で、守護者側と四天王として敵対したにも関わらず、青銀の髪の弟は女によく懐いた。女が使っていた北の四天王の城は、弟と守護者の死天使に渡した。

そのまま女は、魔王から取り戻した黄の宝珠を天に返すつもりだった。

その後はもう、ミラの羽と共に安らかな眠りにつくはずだったのだが……。

「わー、凄ーい、やっぱりフツの魔族だー！　ハーフのザイ兄ちゃんとハーフのレイ姉ちゃんの子供でも、ここまで魔族っぽくなるんだー！」

何故か、行くな、と強引に引き止められてしまった南の四天王の城で。城主たる男の実子を産んでしまった以上、簡単に城を出るわけにいかなくなった女は、正直、どうしてこうなった。そう繰り返し感じる毎日だった。

「全く……^{しおのか}汐ノ香ちゃんにばかり、留守を押し付けちゃダメよ？」

「えー。だってあの城、さざなみの気配が凄く濃くて、汐ノ香でなきゃとても管理できないって言うんだもんー」

「さざなみ」とは、黄泉より奈落の、地獄の谷底といわれる^{ゲヘナ}炎獄を司る暗黒の使徒だという。黒の現守護者である一見いたいけな少女の死天使は、実は炎獄に属する使徒に育てられ、いつかは炎獄に行くはずだったそう。守護者という新たな役目を見つけたために、現在は免れている。

「銀色の髪はまんまレイ姉ちゃんだし、赤い目はザイ兄ちゃんだしなー。子供って面白いなー、これからどんな風に大きくなるのかなあ？」

赤子を寝かせる揺り籠にしがみつ、膝立ち状態で覗き込み続ける弟は女より幸せそうに笑っている。汐ノ香という守護者の死天使に合わせて、「^{よくる}翼権」という名をつけられた弟は、黒の宝珠のカギとして生きることをこの時は信じて疑いもしなかっただろう。

息子が少しずつ、人間と近い速度で育つにつれて、女には悩みが増えていった。魔の血を濃く受け継いだ息子は、吸血鬼でもないのにヒトの血を欲しが。連れ合いの男が医者になって、息子のために血を手に入れ易い生活をしていたが、なまじ強い力を持ってしまった息子は、一人でも旅ができる程の歳になると、満月の夜にはよく姿を消すようになった。

「……獲物を、探しに行ってるのね」

息子が生まれた頃からミラの羽は、ほとんど眠って過ごすようになった。女の寿命をできるだけ長く持たせるため、稀に起こしては息子のことを相談していたのだが、元が天の鳥とは思えないほど辛辣な答が返ってきた。

——アイツ、そうでもしないと廃人になるわよ。どうしてかはわからないけど、アイツは生まれつき魂が凄く弱い。魔物としての自我で何とか普通のふりをしてるけど、ヒトを喰わなきゃ生きられない状態なんでしょう。

ミラは、子供を守るためなら鬼になっていい、と言った。かつてミラの親友が天を裏切ってまで、女の弟を造り出していたように。

「.....私は、あの天使は嫌いだって、言ってるじゃない」

おそらく息子は、命までは奪っていない。それでも人間の手足を喰らう程度のことはしているだろう。普段は従弟妹達と陽気に過ごしているのに。

女がずっとしてきたように、自分の命を人に分けることと、他者の命の犠牲を認めるのは天と地の差がある。母を葬送した天使は、幼い娘が命を分けることは否定したのに、自分は犠牲を省みずに子供を造った。女は、息子に見知らぬ誰かを喰わせたたくない。連れ合いの男も同意見だったが、止めに行くには女の寿命はあまりに残り少なすぎた。息子のヒト喰いに気付いているのは、皮肉にも他には女の弟くらいだった。

何処にも行くな、とかつて女を引き止めた男は、四天王となったことで多くの人を殺していた。女も男も、どちらも無垢であるつもりはない。

ただ、無邪気なふりをする息子の笑顔がいつも辛かった。魔の血を全く持たない従弟妹達に囲まれ、無害なヒトを装うのはどれだけ孤独だろう。いっそ魔界に隠居しようか、と息子がいない月夜にはよく話していた。

——あんたは、『黄輝』のために死ぬ気だろう。

息子という存在が女を縛った。女は昔から自我——自身の望みが乏しく、天の羽のために生きてきて、女の羽を分けた双子の吸血鬼は、結局魔王の手の者に動乱の中で殺された。今では男と息子のためにここにいるだけ。そんな女の性質を、赤い髪の男は本能的に察していたのだろう。あの時は男が重傷で朦朧としていたこともあるが、男の回復のため惜しげなく命を分けて看病する女に、男がとても腹を立てていたのは確かだった。——俺の中に.....勝手に入ってくるな。

放っておいても、ひとまず生きていたので、男は自ら回復できただろう。けれどどうせ、先のない命、と女は思った。本当のところを言えば、天に黄の宝珠を返しに行く前に、男と一時を過ごしたかったのかもしれない。何もせずに隣にいるようなことはできず、自然と男の治癒を願った。

物心ついた頃から、どうしてあの天使——母を葬送した者には唯一腹が立っていたか、女はこの時まで気付けなかった。実害があるので鬱陶しい相手は山程いたが、あの天使自体は旧友の娘を可愛く思っていた。だから、命を削らせるには忍びない、天使がそう気遣ったことは気付いていたのに。

「それなら.....私のことも、守ってほしかった、な」

天使は失った子供を必死に造り直していた。造り手の父と共に吸血鬼の城にいた。

それなら、一目でも幼い娘に向けてくれれば、娘の背には天の羽があると気付け、娘が魔界に放り出される運命も少しは変わったかもしれない。

「親友っていうけど、ミラには気付かなかったじゃない、あの天使」

赤い髪の男は、半ば無理やり、自身の元に女を縛りつけた。本当に女が命を削ることを厭う者は、あんなにも激しい感情を向けるのだと知った。今、拙い命でも女がまだ生きているのは、連れ合いとなった男が何度でも己の気を分けるからだ。

天使はただ、行きずりの甘さと旧い縁で、女から庇護者を奪っただけ。世の理に反して無理やり造り出された弟も、様々な不自由を抱えて生きている。息子も弟も、望んで魔の血を持ったわけではない。

「あの天使は、実の子供のために世界を犠牲にしても許されてるけど……私は、たった一人の息子すらも、本当に助けてあげることができない」

天の羽はもうほとんど、何も女に伝えてくれない。ここまで百年以上、復讐相手に出会わなかったこともあり、すっかり安らかになってしまった。思えばずっと、ミラと話すために命を分け続けてきたことは、大事な相手の一生を守ってきたような錯覚を女にもたらしている。

「あなたのことも……私はもう、守れないの？ ミラ……」

命が足りない。それはどうにも仕様のないことだ。せめて黄の宝珠だけは何とかしたかったが、そちらは弟や黒の守護者の死天使が、天には一応返してくれている。しかし祭壇での封印には至っておらず、それがこの先、女の息子の命を奪う運命を招くことを、女はまだ知らなかった。

黄の宝珠に封印されていた、魔王の補佐役が密かに解放された。そして縁ある女に出した手紙で、息子は魔王一派の罠に嵌ってしまうこととなる。

◆急◆

ジェレスと名乗る、謎の神父の手紙を勝手に見て、東の大陸に出かけた息子が帰らぬヒトとなった。まず行方不明となったが、その後すぐに弟が一人で、悲愴な顔付きで隠れて女を訪ねてきたのだ。

「レイ姉ちゃんは絶対、何もすんなよ！　水燬は絶対オレが助けるから！」

絶対、絶対と繰り返し告げて南の城を後にした弟は、魔王勢力の残党が現在動いており、魔王の器となれる者を得るため強い子供を攫っている、と女に告げた。それが弟にわかったのは、「魔王の器となれる者」には弟も含まれており、息子の身柄が魔王勢力側にあると知って、弟が魔王勢力の誘いに頷いてしまったからだった。

「汐ノ香には絶対言わないで、オレが裏切っただけだって怒らせといて。水燬が殺されたなんてオレも言えない——でも水燬は魔物だから、体さえ取り戻せば、絶対まだ助けられるから！」

女の残り少ない命を心配する弟は、そうして魔王勢力残党に潜り込んでしまった。戦闘能力の高さは女以上に折り紙付きの弟だが、それでも単独で手玉に取れるほど、魔王勢力は甘くはないだろう。

「……確かに、『ジェレス』は『J』なのよね？　ミラ」

——間違いのないわ。リエレルの娘なあんたに手紙を出してきたことも含め、少なくともJの事情を知ってる奴が誰か、魔王側にいる。

黒の守護者の死天使には言うな、と口止めされたので、女も一人身で動くことにした。弟から「ジェレス」の名を聴いた瞬間、ミラの羽は目を覚まして容赦なく力を吸い上げ始めた。周囲の魔物を倒しながら勘を戻し、南の城を後にした女はその後、不思議な縁であるパーティに出会う。

女は本来、生身の姿は、まだ良いところ十六歳だった。力が成長すれば化けられる吸血鬼の能力で、四天王になった頃から大人化していただけだ。

最早、そんな程度の力の浪費も惜しく、吸血鬼としての娘姿に戻った。魔王勢力に北方四天王とばれ難くするためでもあり、いたいけな姿で弟の行方を追って旅をしていたら、その飛竜一行に遭遇したのだった。

「——だから、あんたは戦うなって。強いのはわかるけど、目立って敵に気付かれたら的にされるから」

一見は妖精に見えるものの、おかしい気配を持った金色の髪の少年が、何故かジパングの袴に西風の外套を羽織り、空飛ぶ竜の背に座って言う。

続いて前に座る灰色の髪で黒衣の男も、自らが操る飛竜の行く先を制御しながら、最後尾に座る女に彩のない眼を細めて苦笑うように言った。

「レインさんの力も、魔王の残党は狙ってる。だから多分、手を出すなど言ったんだ、あなたの弟——黒のカギは」

「そうなの……全くあの子ども、相変わらずの説明下手ね……」

金髪の少年と飛竜を操る男は、養子の父子らしい。養子の少年のことを魔王とは関係ない理由で同じ残党に狙われており、少年や飛竜の男が探す相手も残党達に囚われているため、敵対しているのだという。

「黄泉のスズメ、は言い得て妙だな。ユーオンが気付いたことだが、敵は確かに、あなたを『黄輝の宝珠』の資格者と見てる」

「そうなの……やっぱりさっさと、封印しておけば良かったって話ね」

何やら金髪の少年は、他者の感覚を我が事と感じてしまう壊れた五感を持ち、養父である飛竜の男は「力」に固有の色を視る稀な眼を持つらしい。魔王には関係のない者達であるのに、妙に敵側の事情に詳しい。

飛竜の男は非常に力への守りが固く、気も豊富で並みいる化け物の中では四天王に次ぐ実力者だった。金髪の少年は敵の情報や弱味を探すことにはとても長けているが、女と同じで命の量が拙く、女と違って自然界から命の補給ができるので何とか生きてこられたという。

「じゃあアナタだって、戦わない方がいいんじゃないの？」

「オレは敵に生け捕りを狙われてるから、オレが動く方が敵もやりにくくなる。そもそも弱い奴って侮られてるから、懐からとどめも刺しやすいし」

そうして存外に冷酷な見立てをする少年でもあり、こら、と飛竜の男が金髪の頭をぼんぼんと叩く。

「レインさんもユーオンも、基本戦ったらダメだ。俺達の目的は人形使い、王子の奪還だけなんだから」

飛竜の男曰く、女の弟は「人形使い」と呼ばれる悪魔の使役者に契約で首根っこを掴まれており、守護者達を完全に裏切ってはいないが、魔王の残党から離反もできない状態だと聞いた。つまりはその人形使い——幼い契約人さえ押えれば解決する話でもある。

うんうん、と女も頷きながら。ふっと何故か、不意に、妙な事を思った。
「何でかしら……貴男にレインって呼ばれると、何だかむずかゆい感じ」

飛竜の男の、黒い背中を見ながら言った。振り返った男は、いつもなら無愛想でワ
モテの顔をしているのに、この時はまるで人が違ったように、穏やかに微笑んで言葉を
返してきた。

「……不思議だな。実は、俺もだ」

レイアス・ウォーデン、と男は名乗った。女はレイスウとしか名乗ってないのに、レ
インさん、と呼ばれるようになった。二人して飛竜の背中で首を傾げているのを、金髪
の少年は何処か悲しげな顔で見守っていた。

飛竜の男が心配していた以上に、金髪の少年は根が苛烈だった。

女の弟——黒の宝珠のカギである魔の者が、女にとっては大事な相手であると少年も
知っていた。それでも、人形使いに悪魔として手駒にされる弟の脅威が大きく、敵方に
置くにはデメリットが大き過ぎる、と、金髪の少年は隙を見て、決戦の地の天空島で「翼
権」の命を奪ってしまった。

「……アナタが気にすることじゃないわ。翼権がいると、向こうが圧倒的に有利なのは
その通りなもの」

女の痛恨を知りながら弟を剣で貫いた金髪の少年は、少年自身も不安定となる一方
だった。けれど一行は確かに大きく行動しやすくなり、魔の者である弟なら、体を直せ
ば再起することもできる。

ただ、女の息子を助けようとして敵方に潜り込んでいた弟。その思惑を大いに狂わせ
たのが人形使いだった。人形使いの幼子はディアルスという国から攫われた王子と聞いて
いたが、悪魔を操れてしまう歪^{いびつ}な人間なのだ。

「あいつは……パルシィ・ディレス・ディアルスを動かしてるのは、多分……オレの
妹なんだ」

「……——」

重くなり続ける少年の目色に、女は内心大きな溜め息をついた。女達を現在苦しめて
いるのは、筆頭が魔王の補佐役と名乗る神父なのだが、それはミラにとって兄のはずの
相手だった。

「どうして……戦わないと、いけないのかしらね」

女には弟だったはずの、黒のカギ。宝珠という強大な力を軸に、身内で殺し合うこと
が何処でも繰り返される。誰かの掌で泳がされているとわかっているけど、運命の流れに
はいつも飛び込むことしかできなかった。

黒の宝珠のカギが死に体となったことで、これまで動きあぐねていた黒の守護者が、
姿を消した。と、守護者だった天使の使者で女達は知った。

「汐ノ香はさざなみの贖^{あがな}いの天使となり、炎獄に向かいました。そうでもしなければ、黒の宝珠の力で翼権を再起させられなかったんです」

「……………」

渦^{リタン}と名乗る、黒の守護者に仕えていた海竜が、頑丈な人形に力を宿したヒトの姿で、小さな天空島の一つに潜む一行の前に現れていた。

「つまり今、私達の前に立ちふさがるシア君は、汐ノ香ちゃんの代わりに黒の守護者になった翼権。そういう理解でいいわけね？」

「翼権——シアも本意ではありませんが、水燬を助けるには何としても、黄輝の宝珠が必要だと言っています。ミラティシア・ゲールの羽を持った貴女なら、その意味はわかるでしょう？」

海竜はこれまで、代々の黒の守護者に力を貸してきたらしく、女の息子のことだけではなく、天の民の事情もよく知っていた。海竜がこちら側についたこと自体、弟が女達には本当の敵ではないことはわかる。それでも黄の宝珠が敵方に押えられている以上、有利なのは常にあちらだった。

そうして敵側に厄介な相手が復活してしまうと、金髪の少年はますます追い詰められていく様相を見せた。飛竜の男と少年、女だけでよく何とか戦っていたものだと思うが、相手側にはジェレスを名乗る神父、悪魔を人形として操る幼い王子、王子を守るように戦う赤い鎧の天使の人形と、弟以外にも厄介な戦闘力の持ち主だらけなのだ。

「それに……そろそろ……」

女の気配探知は確かに、ある者——ミラが憎み続けた相手を捉えていた。

最初は、これだけ戦闘力の高い者が集まっている天に、どうしてこうも無力なヒトがいるのだろう、と思ったものだった。

「なるほどね。これが、スリージ・ソイルなのね、ミラ」

——……………。

「本当に、鬱陶しくなるほど、場違いに平和な気配ね。こっちは血で血を洗っているというのに……まるで空に、王子様でも探しに来ているよう」

敵となる相手の中で、何気に一番手を焼いたのは赤い鎧の人形だった。天使の姿をした人形は何の力をも無効としてしまう古代の鎧を身につけており、黒い幽鬼の羽を生やして空を飛び回り、大きな長柄の鎌を扱う実戦技術も高い。その人形に宿る霊が金髪の少年の妹であるらしく、飛竜の男が死にもの狂いで幽鬼の羽を斬り落とし、戦意を失った人形が敵にも味方にもならなくなった時点で風向きがやっと変わった。

これまでは飛竜の男が女の弟を、海竜が神父を押し止めており、金髪の少年は赤い鎧の人形と戦っていた。女は全員の後方支援をしていた。

けれどタイミングは完全にわかった。ずっと張り巡らせていた気配探知の網に、ついに引っかかった者の気色。女が場から姿を消したことに、弟と金髪の少年は気付いていただろう。

「.....こんにちは。私の子供を、何処に連れていくつもり？」

天空の島——宝珠の祭壇がある建物で、虚ろな目色の息子と連れ立ち、土色の髪の乙女が着物姿で手を引いていた。どうやら乙女達は魔王の残党から見捨てられたと見え、他には援軍も護衛もなく、ただ息子の体を使う異様な魔物の気配だけが、その塔の中では最も大きい脅威だった。

「あなたが——スリージ・ソイル？」

軽めの着物姿の乙女は、肩までのさっぱりとした髪をかきあげて頷いた。

「どうして私の古い名前を知ってるの？ 今は陽炎^{かげろう}って名乗ってるのに」

「随分、危機感がないことをきくのね。これからあなたは殺されるのに」

あらやだ、と乙女は、本当に緊張感のない声と顔付きで首を傾げる。

「大人の姿にも化けられない北方四天王は、もうとっくに死に損ないだって聞いたわ。現に全然戦わないし、そもそも、自分の子供と戦えるの？」

「.....あなたが、それを言う？」

ク——と思わず、女の口端が裂けたように上を向いた。

「どれだけ強力な幽鬼を、空っぽの水燬に憑けたのかは知らないけど.....たとえ黄の宝珠を、僅かでも使えるほどのものとしても.....——」

敵方が再び奪うために天に来た黄の宝珠を、死体だけで歩く息子は現在持たされている。その体に全く息子の意識はなく、心は息子を殺した赤い鎧の人形の命と共に在る、と飛竜の男が教えてくれた。

それならこれから、どれだけ息子の体を破壊したところで、既に死んでいる息子をこれ以上殺すことなどできない。

「.....夢見がちなお姫様が、狂った悪魔に勝てると思う？」

そして、乙女が声を返す時間もなく、女の背を破って場に炎が生えた。

「——えっ!？」

「時間よ、ミラ。あいつだけは、絶対に殺すんでしょ？」

女の髪が炎に変わった。そう見えるほど火の色をした長い髪がざわりと爆風で舞い上がり、その風と衝撃の源は女の背から広がる巨大な黒い羽と、その黒に絡みつく赤い光の翼だった。

「えっ.....な、何、あなた.....!？」

北方四天王じゃ——と驚く乙女は正しい。北とは水を司る悪魔の地だ。

けれど今、女の残り少ない命に関係なく場に吹き荒れる炎の嵐。それは天の民でも火の家の血もひくミラと、吸血鬼である女が赤い髪の連れ合いから奪った力——火の四天王である男の炎を、男の血を奪うことで女の吸血鬼の羽に宿らせ、ミラに渡す——息子を助けるための三つの命の共調だった。

——うん、そう。あんたをなめてた、あたしが甘かったのよ。

「.....!？」

嵐に巻き込まれて息子の姿が見えなくなると、取り残された乙女の前で、全身に炎を纏う少女が真っ赤な眼で薄ら笑った。

「あなた、なに——

「すずめ」

え？ と乙女が目を丸くした瞬間、全方位から刃のような爆風が乙女に降り注ぎ、原型をとどめないほど全身を切り裂いていった。

「……黄泉の、すずめ。あたしは、あんたのおかげで魔物になったすずめ」

まるで洗礼を浴びるように、返り血の雨が少女を汚していった。

吸血鬼の娘の背に刺さる二対の羽は、黒い羽に火の四天王の血を、赤い羽に少女の心を宿している。現在、赤い髪の男は血を失い過ぎて昏睡状態であり、ここまで来るのに吸血鬼の女も残り少ない命をほぼ使い切った。

それでも親とは、そういうものだとして少女は知っている。少女がそうした存在に守ってもらえることはついぞなかったが、少女の親友は自分の子を取り戻すために、守るべき世界すら裏切っている。

「誰じゃ、勝てないって……？ これ、あんたが仕組んだくせに……——」

少女の気高く赤かった眼に、真紅の昏い^{くら}光がさした。

かつての紅い妖精と同じ、魔の命に囚われた者。波のない黄泉のほとりで微笑む誰かが、天を焼いた少女の目に最期に映っていった。

◆終幕◆

ぼろぼろでも水燬の体を奪い返したことで、黒の守護者となったシアは遠慮なく魔王の残党を裏切り、飛竜の男と金髪の少年は赤い鎧の人形と、人形を操っていた王子を地上に連れて帰ることができた。

シアにすれば、及第点の顛末だった。

それでも失われたものも数多かった。南の四天王ザイスィは昏睡が続き、水燬を運んできたレイスゥも、ザイスィと共に寝たきりになってしまった。

シアにとっては、汐ノ香の行方が皆目わからなくなり、全くコンタクトが取れなくなったことが痛かった。さざなみの天使とはそういうさだめにあるのだと聞いても、そもそも汐ノ香が守ろうとした「翼権」が本当に、意識を戻したわけでもなかった。確かに金髪の少年ユーオンに殺された後、汐ノ香という守護者のカギだった「翼権」の心が消えたからこそ、シアは新たな黒の守護者になった。

しかし彼は、本来黄輝の守護者となれるはずだった力の持ち主であり、そのため怨念として長く眠りながら時を待っていたのに、黒の守護者を引き継ぐことになった。それはシアという、最も初めに殺された天の少年に近い心を眠らせていた、宝珠側の事情としては不本意だろう。

「Jの兄ちゃんも、せっかく宝珠が守ってたのにな。一緒にユーオン君に殺されたかな？

飛竜より誰より、一番の死神があんな奴だなんて、ね」

水燬もその両親も、旧知の医者に預けた。両親達にはシアの力を分けたミラの羽を片翼ずつさして命を留めたが、一度殺されて魂も危うい水燬は、魔物として以外で目覚める望みは薄い。そもそもヒトを喰らう魔物の己に苦しんでいたもので、これで良かったのかもしれない、とシアは思っている。

「ザイ兄ちゃんとレイ姉ちゃんは……それでも、助けたかっただろうけど」

水燬をどうしても助けたかったのは、「翼権」も同じだ。最早、シアとは違う存在だったと言える、シアの代わりに造られた吸血鬼。

「まあ、オレが黄の宝珠を持ってるからには、誰も死なせないで済むし。あんたの望み通りになったんじゃない？ さざなみの天使——凧サン？」

「……………」

さざなみとは、地獄の谷底に潜む暗黒の使徒のこと。それなら魔界で、更に黄泉である狭間にいけば、会えるだろうと思っていた。

さざなみの凧。汐ノ香を連れていってしまったはずの、凧自身は黄泉に閉じ込められた、青白い狐火を灯し続ける妖^{あやかし} 上がりの紅い魔物だ。黄泉と魔界の境である小さな泉で、水上に姿を狐火で映し出してシアを見ていた。

長く紅い髪と青白の目。かつてそれが魔竜と呼ばれる荒くれ魔物だったことを、シアの従える海竜だけが憶えていた。

「……そっか。シア君は、誰も死なせないけど、誰を助ける気もないんだ」

くす、と。とても害のない、むしろ哀しげとも言える顔で凧は笑った。

「……そうだね。だってシア君は、これが夢ってわかってるものね？」

漣^{さざなみ} 汐ノ香。そんな黒の守護者がいて、そのカギであることができた翼籠。けれどどの道、彼らの道は分かたれるのだ。それなら何が真実であっても、彼にはどちらも、どうでもいいだけの世界だった。

やがて水燾はシアの力の一部を受け取り、水月^{みづき}という名で生きる未来も残されている。もしくはもっと面白い道もある、と凧が微笑む。

「どっちもごめんだね。もうあんたにも、二度と会いたくないし」

それでもいずれ縁は繋がれる。それまで彼は心を隠し、夢の終焉を待つ。波風のない黄泉の水面。水底に沈む花の残像が、最後に揺れた気がした。

-INFOMATION-

Many thanks for your visit.

※橘診療所シリーズ

- 6：本作 (<https://puboo.jp/book/135643>)
- 8：『雨燕と時知雨』 (<https://puboo.jp/book/112782>)
- 9：『雀の涙』 (<https://puboo.jp/book/134399>)
- 10：『水中花』 (<https://puboo.jp/book/134583>)
- 11：『迷探偵猫羽のよろず事件簿』 (<https://puboo.jp/book/134686>)
- 12：『雨久花』 (<https://puboo.jp/book/113309>)
- 13：『迷探偵猫羽の乙女事件簿』 (<https://puboo.jp/book/134653>)
- 15：『ツキモノ -白-』 (<https://puboo.jp/book/134788>)

X: 滓 (sai)@kazari_sou

黄泉スズメ

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
